

公開ブリーフィング(第3回)

持続可能なスポーツイベントへの提案

持続可能なスポーツイベントを実現する
NGO/NPOネットワーク(SUSPON)

代表 羽仁 カンタ



持続可能なスポーツイベントを実現する
NGO/NPOネットワーク
Sustainable Sport
NGO and NPO Network





持続可能なスポーツイベントを実現する
NGO/NPOネットワーク

Sustainable Sport NGO and NPO Network

SUSPON(サスポン)とは

2020年の東京オリンピック・パラリンピックを持続可能な大会とすることをきっかけに、その後の東京、ひいては日本や世界の持続可能な社会づくりにつなげていくことを目指して自ら当事者として活動し、また関係団体に働きかけているNGO/NPOのネットワークです。



なぜ、NGO・NPOが東京2020大会に関わるのか！

★市民参加

「オリンピック/パラリンピック」こそ、市民、企業、行政が参加して、日本の未来であるレガシー(遺産)を作る、そのプロセスや実施にNGO/NPOが影響を与えていくことでより開かれ、透明性のあるものへ。

多くの人々が参加できる仕組みを作り参加型の社会を構築

★横のつながりを活かす

環境だけではなく、人権、福祉など国内外のNGO/NPOが持つネットワークや横のつながりを活かし、幅広い視野で問題を捉え、解決していくことができる。



なぜ、NGO/NPOが東京2020大会に関わるのか！

★対話の場をつくっていく

行政や企業と対立するのではなく、国際的なネットワークや様々な経験を活かして、開催に向けた提案、対話の場を作り、お互いを尊重し、協力し合っていくことこそが、持続可能な未来に向けた唯一の道でしょう。

SDGs・パリ協定に応える 「持続可能な社会」こそが レガシー



SUSPON加盟団体 (2017年8月末現在)

- NPO iPledge (アイプレッジ)
- A SEED JAPAN
- 地域環境デザイン研究所 ecotone
- NPO法人 ezorock
- 国際環境NGO FoE Japan
- 環境パートナーシップ会議 (EPC)
- 環境リレーションズ研究所
- Climate Youth Japan (CYJ)
- グリーン購入ネットワーク (GPN)
- グリーン連合
- CSOネットワーク
- 持続可能な社会をつくる元気ネット
- 水Do!ネットワーク
- 認定NPO法人 スペースふう
- 地球・人間環境フォーラム
- 日本自然保護協会 (NACS-J)
- 日本野鳥の会

- ・ 代表 羽仁カンタ (NPO iPledge)
- ・ 副代表 星野智子 (環境パートナーシップ会議)
- ・ 事務局長 坂本有希 (地球・人間環境フォーラム)
- ・ SUSPON事務局: 一般財団法人 地球・人間環境フォーラム <http://suspon.net/>



6つの部会

- 実践活動(⇒部会ごとに、視察、ディスカッション、勉強会など)
- 提言活動(⇒部会ごとに、提言内容作成など)

ごみゼロ(廃棄物)

気候変動・エネルギー

責任ある資材調達

生物多様性

SUSPON YOUTH

ボランティア

➤ 状況に応じ増やしていく



持続可能なスポーツイベントを実現する
NGO/NPOネットワーク
Sustainable Sport NGO and NPO Network

参加と協働

➤ 関係者が協働していくためのきっかけ、機会を作っています。

NGO/NPO

企業

個人(専門家)

東京都/環境局・オリパラ局

組織委員会/持続可能性部

★ステークホルダー会議・・・16年5月より、隔月で開催中！

- 6つの部会から提言内容を提示し、議論する場
- ゲストスピーカーを招いての問題提起の場

●議論する場をフラットにつくる

※一方的な場ではなく、加盟団体、東京都、組織委員会などが対等に議論できる場を形成しています。

●東京2020大会に対応できる活動を多くのアクターと協働したい



部会と活動内容(2016年度)

ごみゼロ(廃棄物)

責任ある調達

生物多様性

エネルギー

- 全体会：月に1回【参加団体全て】2016.5.18より
- ステークホルダー会議：
 - 2016.6.22 第1回
 - 2016.8.30 第2回(テーマ:ごみゼロ)
 - 2016.10.19 第3回(テーマ:責任ある調達)
 - 2016.12.7 第4回(テーマ:生物多様性)
 - 2017.1.20 第5回(テーマ:ごみゼロ／エネルギー)
- シンポジウム：
 - 2017.2.16【一般・メディア公開】



ごみゼロ(廃棄物)部会

ごみゼロ部会では、リユース
食器の導入や、水飲み・給水
インフラ導入推進、食品ロス
の削減等に取り組んでいる



参加団体



NPO iPledge
(アイプレッジ)



持続可能な社会を
つくる元気ネット



水Do!ネットワーク



認定NPO法人
スペースふう



地域環境デザイン
研究所ecotone



地球・人間環境
フォーラム



問題意識

● 大規模なイベントは短期間に膨大な廃棄物が排出される。東京2020大会では、大量生産・大量消費・大量廃棄ではなく、3Rの優先順位に沿った様々な方法を用いて、ごみゼロを目指した大会運営がなされるべき。東京2020大会を契機に、脱使い捨ての取り組みを定着させ、循環型社会の構築を。

目指すもの

- スポーツ施設、お祭やさまざまなイベントにおいてリユース食器が日本の文化として、定着する
- 水飲み場、水筒への給水可能なインフラをスポーツ施設や街中に増やし、人々の行動変化とともにレガシーとする
- リサイクル金属使用によるメダルや高度資源化、食品ロス削減に努め、レガシーとして社会へ定着する

実現のために...

提言

使い捨て容器に替えて、繰り返し洗って使用する
リユース食器(リユースカップ)を導入

実践

リユースカップが普及するフランスの取り組みを視察

2016.11.19～21 ベルギー及びパリ視察 ⇒日本に適した方式を検討

実践

東京都「持続可能な資源利用に向けたモデル事業」として
味の素スタジアムでのリユースカップ試験導入予定

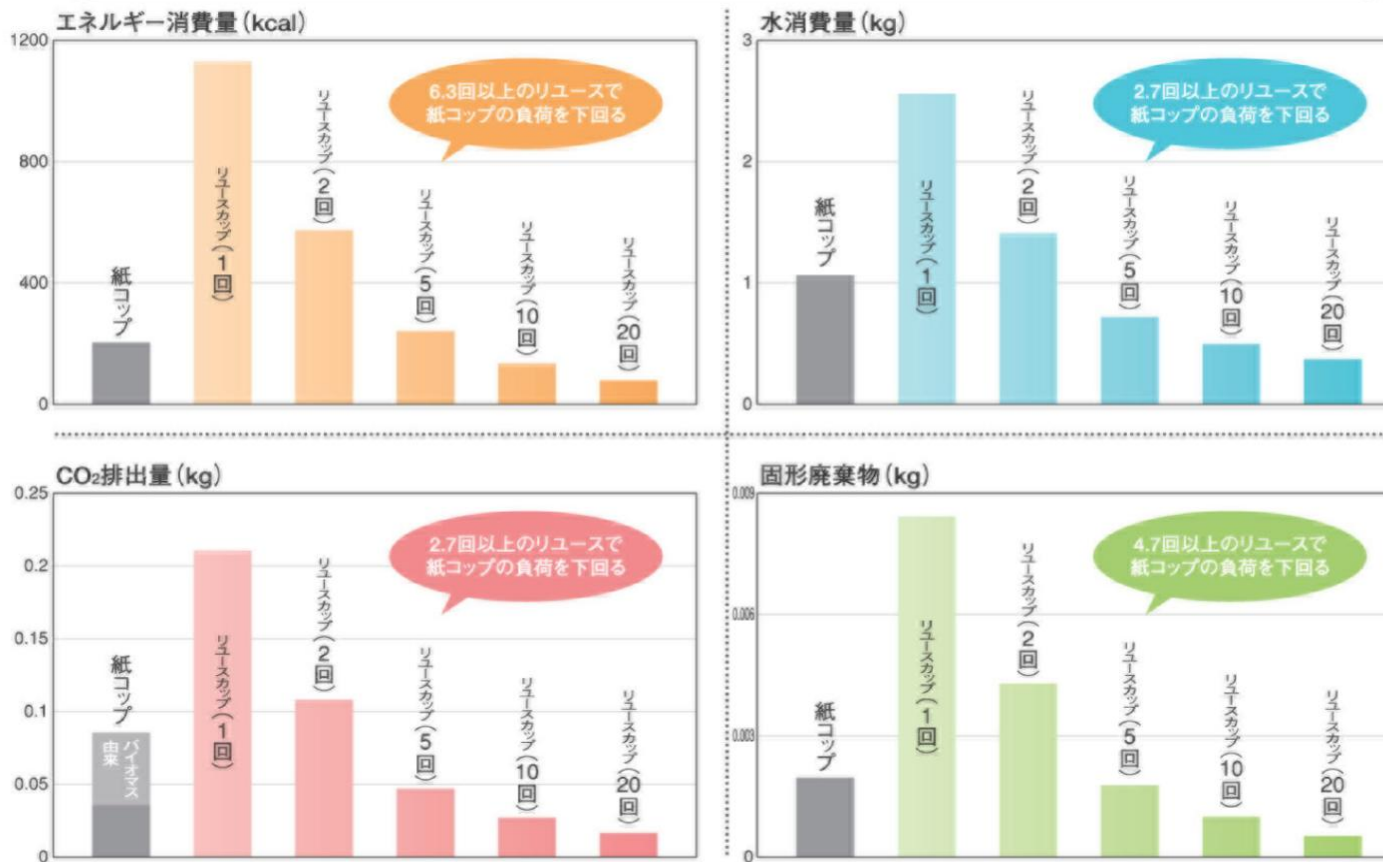
リユース食器、リユースカップとは

- 使い捨て容器に替えて利用する、何度も洗って繰り返し使う食器の総称、丁寧に扱えば200回以上繰り返し使用可能。
- 鋭角的に割れず、軽く、プラスチックの中でも安価なポリプロピレン (PP) 製が多い
- リユース食器の洗浄・保管を社会福祉施設が担うことが多く、環境と福祉をつなぐ取り組み
- 地震等の災害発生時に非常用の食器としても活用されている



リユースカップの環境負荷低減効果

リユースの回数に応じた環境負荷（使い捨て紙コップと比較）



東京大学安井研究室実施のLCA※分析をもとに作成

※ライフ・サイクル・アセスメント (Life Cycle Assessment)

原料採掘段階から生産・使用・輸送・廃棄段階に至るまで、製品の一生(ライフサイクル)を通じた環境への影響を定量的に分析、評価する手法。



持続可能なスポーツイベントを実現する
NGO/NPOネットワーク
Sustainable Sport NGO and NPO Network

リユース食器の導入事例 及び 実績

- ・ サッカー場
山梨中銀スタジアム
デンカビッグスワンスタジアム
等々力競技場
- ・ 野球場（実証実験等）
- ・ 野外音楽フェス、コンサート
- ・ フードコート
- ・ 映画館
- ・ オフィス
- ・ イベント



- ・ スポーツイベント（国体など）
- ・ 環境イベント、食のイベント
- ・ お祭り、学園祭
- ・ 会議、展示会
- ・ 結婚式、バーベキュー
- ・ バザー、フリーマーケット
- ・ 海の家
- ・ 避難所など （過去の事例含む）

※1997年から活動開始し、
今年で21年目となります。

◆利用数が最も多かったのは・・

ap bank fes '12（2012年7～8月、7日間・8年間実施）

- ・ つま恋（静岡）、淡路島（兵庫県）、みちのく（宮城県）で開催。
- ・ 皿 24万275個、カップ 13万8,348個、合計37万8,623個を使用

祇園祭（2014年7月15～16日・今年で4年目）

露天商の協力のもと、リユース食器21万個 が導入された。史上最大規模。

祇園祭でのリユース食器導入

来場者数は24%増えましたが、全体の廃棄物量は25%削減しました。

2014年7月から開始し今年で4年目。

日本三大祭りの一つ祇園祭の宵山期間2日間に屋台や夜店212店舗で
カップ大小(各3万個)、トレー大(11.5万枚)、トレー小(4万枚)を導入。
32カ所にエコステーションを設置。2000人のボランティアが運営に関わる。

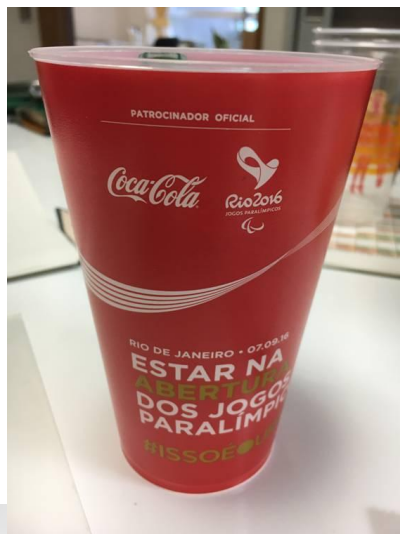
	2013年	2014年
資源物	1,550kg	8,130kg
もやすごみ	55,780kg	34,430kg
来場者数	50万人	62万人
1人当たりごみ量	114.66g	68.65g



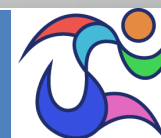
2014年の食器紛失・破損率は21%、2016年は5%に！

カップデザインに可能性があります。

16



リオ・パラリンピックで
使用されたリユース可能
なカップ（デポジットなし）



持続可能なスポーツイベントを実現する
NGO/NPOネットワーク
Sustainable Sport NGO and NPO Network

2つのシナリオで導入をご提案

➤ 観客向けのリユースカップ（デポジットあり、持ち帰り可）

- ・各競技会場（開会式、閉会式含む）
（オリンピック37会場、パラリンピック18会場）
⇒対象：観客（観客向け売店に導入）

➤ 選手、メディア向けのリユース食器

（デポジットなし、回収して繰り返し利用）

- ・選手村 ※
⇒対象：選手及び選手団
- ・IBC/MPC（国際放送センター/メインプレスセンター）
⇒対象：各国メディア（メディア向けダイニング）

※陶磁器の食器が導入されない場合



観客向けのリユースカップ

- お土産として持ち帰りたくなるようなデザイン性の高い「東京2020限定リユースカップ（650ml）」を1200万個導入し、デポジット500円をかけて販売。（ロゴやマスコット等の入った東京2020統一デザイン又は各競技ごとにデザインを分ける）
- 利用者の80%※が持ち帰ると想定し、デポジットの未返金分でカップの製造費、洗浄費、輸送費、オペレーションにかかる人件費を賄う。
- 観客が持ち帰らない場合は売店又は自動回収機に返却できる仕組み（使用済カップを回収、デポジット金500円を返金）。
- 返却されたカップは洗浄施設で洗浄し、東京2020大会オフィシャルオークションで販売。収益をIOCに還元。スポーツ振興に活用する。又は、都の各種施設で使用する。

※UEFA欧州選手権、ラグビーW杯でリユースカップが導入されたフランスのデータを参考になっている

自動回収機の一例

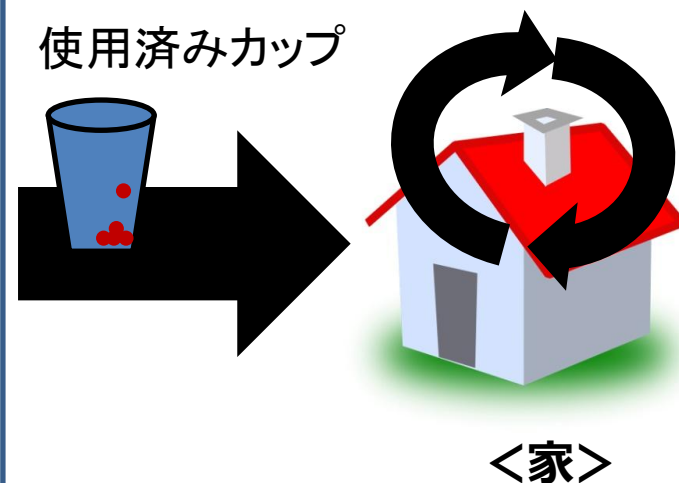


⇒2016年UEFA欧州選手権(EURO)では、試合ごとにデザインの異なるリユース可能なカップが利用された。⇒⇒⇒



観客向けのリユースカップ運用イメージ

- 利用者の8割が家に持ち帰り、様々な用途で再利用すると想定
- デポジットの未返金分の収益でカップの製造費、洗浄費、輸送費、オペレーションにかかる人件費を賄う



選手、メディア向けのリユース食器

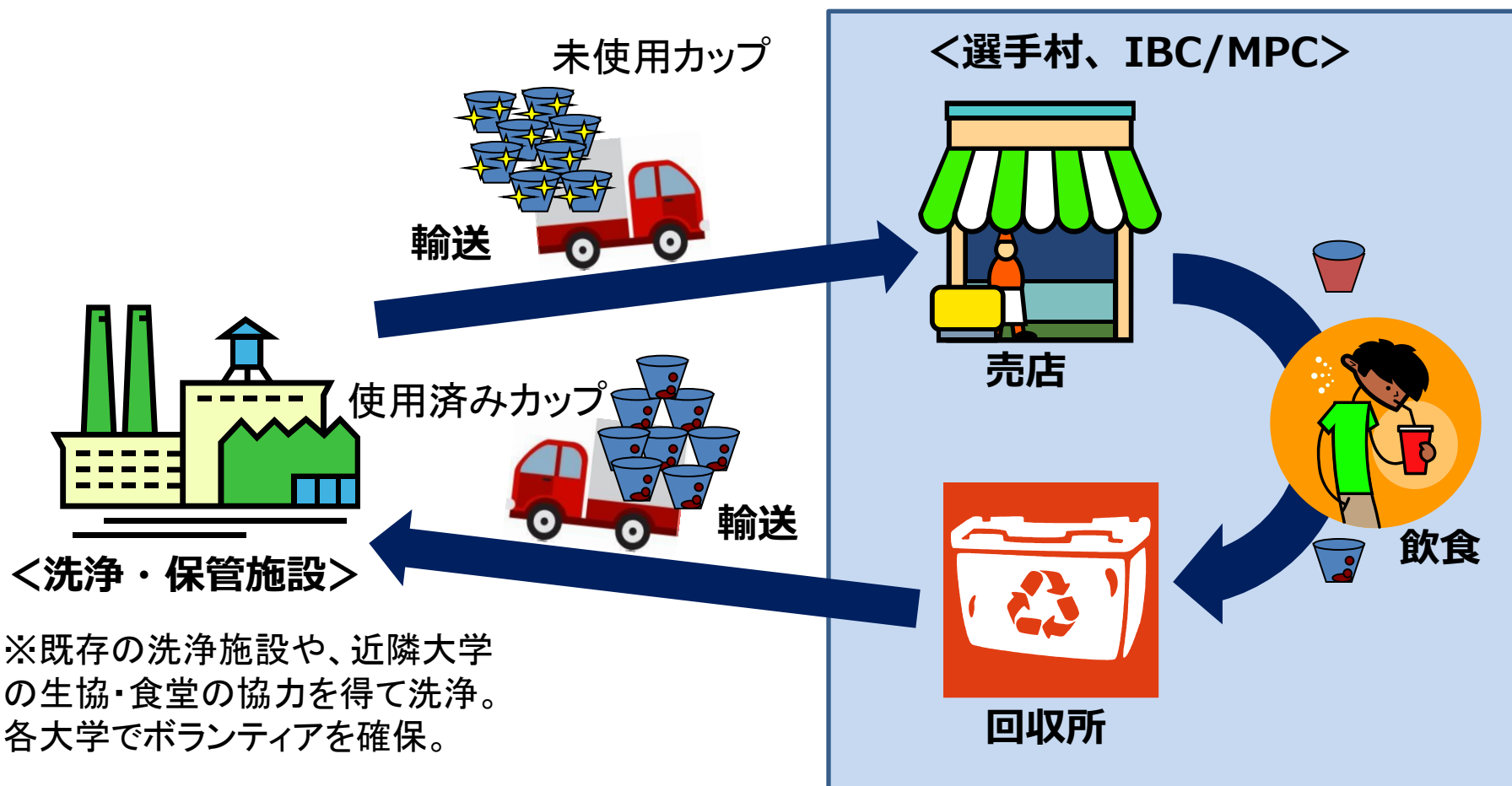
- 東京2020オリジナルデザインのメラミン製のリユース食器（大皿、小皿、どんぶり、お箸、スプーン、フォーク、カップ）各100万個を導入。
- デポジットはかけず、利用者には使用済の食器を必ず食器返却所に返却してもらう。使用済みのリユース食器は外部の洗浄施設で洗浄し、再度、選手村、IBC/MPCで使用する。

（ハラル食にはすべて新品のリユース食器で対応する）
- 大会終了後は東京2020に参加した選手等が使用した食器として、東京2020大会オフィシャルオークションにかける。収益はIOCがスポーツ振興に活用する。
- 過去にスポーツの国際大会（サッカーやラグビーワールドカップ）でリユースカップの導入例はあるが、**食器** 導入は初の試みとなる。



選手、メディア向けのリユース食器運用イメージ

使用済みのリユース食器は回収され、外部の洗浄施設で洗浄し、再使用する



使用済みリユース食器の洗浄方法

- 既存のリユース食器洗浄施設を活用（東京3、横浜2、全国45カ所）
- 選手村、IBC/MPC周辺にある大学の生協、食堂の協力を得て臨時的に洗浄

※組織委員会と連携協定を締結した大学の協力を図る



↑祇園祭で使用したリユース食器、カップ20万個の洗浄を京都市内にある6カ所の大学生協・食堂でボランティアが実施した例
五輪開催時期には、大学が夏休みに入り、空いている洗浄設備を活用



試算案

デポジット未返金分の収入48億円により、リユースカップ・食器の製造費、洗浄費、輸送費、オペレーションにかかる人件費を賄う。使用済カップ、食器のチャリティオークションにより IOCの収益にもつながる仕組み

➤支出

	観客向けリユースカップ	選手、メディア向けリユースカップ
リユースカップ、食器製造費	12億円(1個100円と想定、1200万個)	24億円(1個400円と想定×600万個)
洗浄・輸送費(返却食器の洗浄)	4,800万円(20円×240万個)	3億6,000円(20円×600万個×3回)
回収機設置等費用	5,000万円(100万円×50カ所)	—
人件費	6億円(1万円×2,000人×30日)	6,000万円(1万円×200人×30日)
合計	18億9,800万円	28億2,000万円

➤収入

	観客向けリユースカップ	選手、メディア向けリユースカップ
未返金デポジット	48億円(960万個×500円)	—
チャリティオークション販売収益	???円	???円
合計	48億円+???円	???円

➤全体収支

	収入	支出
合計	48億円+???円	47億1,800万円



環境負荷低減効果

観客向けにリユースカップ1200万個を導入することによる環境負荷低減効果の例。
 2012年ロンドン大会、2016年リオ大会を超える二酸化炭素発生抑制、廃棄物削減につなげる
 効果が期待される。

	紙コップをリユース カップに切り替えた 場合		プラスチックカップを リユースカップに 切り替えた場合	
	1個あたり	1200万個	1個あたり	1200万個
廃棄物発生 削減量	15.3g	1836t	14.4g	1,728t
二酸化炭素 削減量	48.0g	5760t	153.4g	1万8,408t



- 環境省「3R行動見える化ツール」※に記載されている環境負荷低減効果の数値を引用。
- リユースカップは繰り返し使えるため、製造時の環境負荷、会場から洗浄施設までの輸送は考慮されておらず、洗浄の際の環境負荷は水0.98ℓ、洗剤0.14g使用する条件で計算されている。カップのサイズは350mlと想定したもの。
- 写真は「3R行動による環境負荷削減効果の見える化について ―「3R行動見える化ツール」の開発に係る業務報告書―」より引用

